



第1回 COE国際シンポジウム プレシンポジウム 開催レポート

神奈川大学21世紀COEプログラムでは、3年目を迎え、調査・研究の整理とともに、プロジェクトテーマを再確認し、総括に向けての方向性を探る場として第1回国際シンポジウム「非文字資料とはなにか 人類文化の記録と記憶」を2005年11月26日(土)、27日(日)の両日に開催した。なお、これに先立ち、プレシンポジウム「版画と写真 19世紀後半 出来事とイメージの創出」を11月20日(日)に開催、合わせてシンポジウムの企画展示「浮世絵における常識と非常識 復刻版でみる『名所江戸百景』」を日本常民文化研究所常民参考室で11月18日(金)~30日(水)まで開催、期間中、ミュージアムトークならびに木版の摺りの実演も行われた。また、このシンポジウムには、海外提携研究機関の研究者にも参加いただき、期間中の11月27日(日)には懇談会が開かれ、訪問・派遣研究員制度および今後の学術交流に関する検討を行った。

シンポジウムおよびプレシンポジウムの本報告書はそれぞれ刊行されるので、ここでは開催レポートの簡潔な紹介にとどめる。

初日、26日の午前中は、COEプログラムのサブリーダー川田順造氏による基調講演「非文字資料から見る人類文化」が行われた。川田氏は、1)知覚=運動体としてのヒト 2)知覚と運動の相互作用が生み出す文化 3)人類文化における文字 4)連続のなかの比較と断絶における比較、の4つの問題群を、長年にわたるフィールドワークの具体的資料を提示しながら論じ、アフリカ・フランス・日本における文化の三角測量の有効性を説き、そのポイントを全世界

的に広げることで、「人類文化研究のための非文字資料の体系化」がなされる可能性を説きつつ、4つのセッションに対する問題提起を行った。

川田氏の基調講演を受ける形で、26日の午後には、セッション「記号と写実 19世紀後半メディアがもたらした衝撃」(コーディネーター・北原糸子)セッション「身体技法と祭祀芸能 祭祀者の動きと人形の動きから」(コーディネーター・廣田律子)が行われ、27日午前にセッション「民具と民俗技術」(コーディネーター・河野通明) 午後にセッション「非文字資料の情報化と教育」(コーディネーター・的場昭弘) その後に総合討論(コーディネーター・佐野賢治)を行って幕を閉じた。

本プログラムでは、初、2年度はあえて国際シンポジウムを開催せず、中間年に前半の成果を確認するとともに、国内・外の専門家から意見を聞き、後半の研究調査、総括に向けての方向性を探ることを目標にこのシンポジウムを開催したわけであるが、その目的は十分に達成できたと思われる。今回のシンポジウムの反省点も踏まえて、次回以後は、本プログラムの成果を中心に、国際的に発信できる内容のシンポジウムを目指していきたい。(佐野)

